

# ポパーの批判的方法について

立花希一

## 一 序

ポパーは「批判」の重要性を強調してやまない。なにもものをも権威として受け取らず、あらゆるものを批判的検討にかけようとする態度を採用することを勧める。<sup>(1)</sup>この批判主義的アプローチは科学(特に自然科学)の世界によく見出せるものではあるが、必ずしも科学だけに限られるものではなく、哲学にも、政治にも、さらには教育にも拡大、応用できる<sup>(2)</sup>し、しかもそうすべきだと主張し、この要求を「批判的合理主義」と呼んで<sup>(3)</sup>いる。ポパーは自らそれを実践するばかりではなく、学生たちにもそれを体得し実践することを要求するのである。ポパーゼミにおけるポパーと学生とのやりとりをパートリーがうまく描写している<sup>(4)</sup>ので、それを紹介することにしよう。「批判、批判」とお題目を唱えるだけで、実践しようとしないうれわれれに對する戒めとなるであらうから。

イギリスやアメリカにおける大学院ゼミの演習は、学生が論文

を読み、それに他の参加者が質問やコメントを加え、それから一般討論に移るというものである。教授の中には討論に加わるものもいるが、あまり深く立ち入ろうとはしない。……ポパーゼミは違っていた。そのゼミは、ポパーと論文を読み上げる人——学生であろうと客員教授であろうとかまわさない——との間の激しい対決であった。この特殊な集まり(「パートリー」が初めて参加したゼミ)では、学生はようやく二つの段落を読むことができたのである。ポパーはあらゆる文に口をさしはさんだ。何ものも批判のないまま見過ごされることはなかった。すべての言葉が重要なのであった。彼はある質問をした。学生はそれを避けた。ポパーは同じ質問を繰り返した。学生は再びそれを避けた。ポパーはその質問をもう一度繰り返した。とうとうその学生は答えた。「それではあなたが最初にいったことは間違っていたのだね」とポパーは尋ねた。学生は言葉を並べてこの嫌な結論を避けた。ポパーは聞いていたが、それからいった、「なるほど。だけど、あなたが最初にいったことは間違っていたのだね」と。その学生は学んでい

た。そして誤りを認め、「謝るかね」とポパーは聞いた。学生はそうした。するとポパーはにっこりと笑って、「よろしい。これでわれわれは友達になれる」といった。<sup>(4)</sup>

この描写からは「批判的態度」をとり、それを実践することがどういうことであるかがよくわかるであろう。だが、「批判的態度」をとるべきだといっても、その方法が示されなければ、とりようがないのである。「批判的方法」を理解し、体得しなければならぬのである。ところが、ポパーは、その「批判的方法」についてはまとまった論文を書いておらず、いくつかの著作や論文の中で断片的に述べるにとどまっている。

それらを手掛かりにして、ポパーの「批判的方法」とは一体どのような方法なのかを考察し、また従来の批判的方法とどのように違うのかを具体的に明らかにすることが、本稿のねらいである。ポパーの批判的方法を提示する前に、先ず、伝統的な(ポパーが誤っていると考えている)批判的方法を検討しよう。

## 二 伝統的な批判的方法

先に述べた「批判主義を哲学に応用する」という言明は、哲学者には奇異にひびくかもしれない。というのは、哲学は、伝統的に「前提批判の学」とみなされてきたのであって、今さらポパーにいわれるまでもなく、わかりきったことであると思われるであろうから。

哲学が批判を重視し、批判的方法を採用してきたことは確かにそ

の通りである。しかし、ポパーによれば、哲学者が用いてきた批判の方法は、彼の唱える批判の方法とは根本的に違っているばかりではなく、哲学者はむしろ間違った批判の方法を用いており、その結果、哲学の議論が不毛なものになりがちになっているといわれている。<sup>(5)</sup>

ポパーは、哲学者が採用する批判の方法を次のように叙述している。<sup>(7)</sup>

ある哲学者Aが哲学の理論を提出し、その理論の証明、あるいは真なる理論であるという主張を正当化する論証、を行おうとする。それに対して、別の哲学者Bは、Aの証明を分析し、それが妥当でないことを示すのである。自分の理論を確立したという哲学者Aの主張の、哲学者Bによる破壊的分析が、哲学者たちが批判について語るとき普通念頭においているものである。別のいい方をすれば、哲学者たちが普通、批判によって意味するものは、ある理論が真であるという主張を正当化するものとして提出されている論証の非妥当性を示すことを目的とする分析のことである。

この哲学者の批判的分析にかかれれば、最後には懐疑論か独断論に行き着くことはすぐみてとれるであろう。<sup>(8)</sup>

哲学者Bは、哲学者Aを次のように批判すればよいのである。

B その真理性が証明されていない理論を受け容れることは合理的ではない。どういう根拠でああなたは、理論aが真であることを知

っているのか。

A なぜなら  $a_1$  は  $a_2$  から導出され、しかも  $a_2$  は真であるから。

B それではどうしてあなたは  $a_2$  が真であることを知っているのか。

A なぜなら  $a_2$  は  $a_3$  から導出され、しかも  $a_3$  は真であるから。

これは無限後退に陥り、どんな理論も合理的に容認することができないという懐疑論に至る。近代哲学において、この批判的方法を用いて、懐疑論の帰結を導いた代表的哲学者はヒュームである。彼は、感覚知覚に基づいて外的世界の存在を証明する、あるいは十分な理由を提出することは不可能であり、したがって人々は外界の存在を非合理的に信じているにすぎないという懐疑論の帰結に到達したのである。

懐疑論を避けるための一つの方法は、正当化の必要のない、究極的な権威（例えば、感覚経験、理性的直観、あるいは自明な証拠）に訴えて、無限後退の連鎖を断ち切ることである。しかしながら、何らかの究極的な権威を受け容れることは独断論にはかならない。というのは、その究極の権威は証明されていないにもかかわらず、独断的にそれを真として受け容れているにすぎないのであるから。ところが、攻守を転換すれば、哲学者Aは自分の理論を容易に擁護することができるのである。

A その虚偽性が証明されていない理論を受け容れることは非合理ではない。どういう根拠でああなたは、私の理論が偽であることを知っているのか。

B 根拠  $b_1$  によってである。

A それではどうしてあなたは  $b_1$  が真であることを知っているのか。

B なぜなら  $b_1$  は  $b_2$  から導出され、しかも  $b_2$  は真であるから。

A それではどうしてあなたは  $b_2$  が真であることを知っているのか。

B ……

A あなたは、私の理論  $a_1$  が偽であることを証明する根拠が真であることを証明するのに成功していない。したがって、私の理論を維持することは非合理ではない。

この（反）批判的方法を採用すれば、人はどんな理論も容易に擁護することができる。例えば、神を信じている者は、この方法を用いて、神の非存在はまだ証明されていないのだから、私の信仰は非合理ではないと主張できるであろう。

相手に正当化を要求し、正当化に失敗しているとして批判するという方法には、要求されている正当化の程度（証明、十分な理由、確からしい理由、いい理由など）に応じて、様々なバリエーションが存在するが、相手に正当化を要求するという点では全く同じなのである。何らかの理由が与えられない限り、攻撃する側はどんな理論も認めない（懐疑論）し、防衛する側はどんな理論も撤回しない（独断論）のである。

それでは、人が懐疑論あるいは独断論の立場をとるとどういう結末に至るかを考察することにしよう。

自分にも相手にも同じ方法を採用する、首尾一貫している懐疑論者は、独断論の道をとることはできない。懐疑論者に残された唯一

の道は、判断中止することである。したがって、以上のような批判的方法による議論では、最終的には独断論者の理論しか残らないことになる。

しかしながら、全員が同じ思想の持ち主でない限り、独断論者の間には、相互に衝突し合う複数の理論が残ることになる。この状況は、この種の批判的議論によれば、当然の帰結である。というのは、独断論者は、もし攻防において首尾一貫しているならば、自分のとは異なった理論が偽であることを証明できない限り、異なった理論を奉ずる人々に対して、その理論を撤回するように主張することができないからである。

それでは、これで批判的議論は終わりを告げ、その結果として、複数の独断論的な理論が残るのであろうか。

ところが、独断論者は、どんな理論も許容するほど寛容ではない。なぜなら彼らは自分の理論の真理性を確信しているので、自分の理論と衝突する他の理論は間違っているとみなしがちであるから。そこで彼らは、懐疑論者であると同時に独断論者になるのである。すなわち、自分の理論を擁護するときには独断的になり、他の理論を攻撃するときには懐疑的になるのである。例えば、プロテスタントの哲学者は、プロテスタントイズムの教義については独断的であり、カトリシズムの教義に対しては懐疑的になるのである。他方、カトリックの哲学者は、まさにその逆である。

上述の場合のように、その立場がかなり明白な場合には、両者とも批判のやり方において首尾一貫しておらず、したがって、その理論の受容および拒否の仕方が誤っているということに気がつくのは

わりと容易である。しかし、もっと洗練された、というよりもっと巧妙な立場が存在しうるのである。しかも一見理に適った発言のように見えるので、その方法の誤謬を見破るのは難しいのである。例えば、ある哲学者は次のように主張するかもしれない。自分の理論は、真であることを証明することはできないけれども、それを主張するにふさわしいいくつかの理由がある。ところが、あなたの理論は、残念ながら、それを裏づける十分な理由があるとはいえない。したがって、あなたはその理論を撤回し、私の理論を受け容れるべきであると。しかしながら、このような主張においても、防衛においては独断的であり、攻撃においては懐疑的であるという基本的な構造は変わっていないのである。

このような批判的議論においても、ある哲学者が自分の理論を撤回し、他の理論を奉ずるようになることが起こるかもしれない。しかし、この場合においても、彼は一つのドグマから別のドグマにいわば改宗したにすぎないのである。彼の独断的で權威主義的な態度は相変わらずなのである。

なぜ独断論者は、自分の理論を防衛しようとするのであろうか。それは、彼らがすでに真理を獲得していると思込んでいるからである。彼らは、論敵を攻撃するためにだけ、批判的方法を用いるのであって、批判的方法は自分にとっては不必要なものである。彼らは何ごとかを知ろうとしたり、過ちから学ぼうとして批判的方法を用いることはしないのである。

### 三 ポパーの批判的方法

ポパーは、哲学者の用いる誤った批判的方法とは根本的に異なった批判的方法をアインシュタインから学んだとして、次のように語っている。<sup>(11)</sup>

〔アインシュタイン〕には、マルクス、フロイト、アドラーの独断的態度とは全く異なった、そして彼らの追従者たちの独断的態度とはさらにいっそう異なった態度があった。アインシュタインは決定実験を求めた。その決定実験は彼の予測と一致しても彼の理論をけっして確立しはしないであろうが、一致しない場合には、彼がまっ先に強調したように、彼の理論が支持しえないことを示すであろう。……こうして私は、……科学的態度とは批判的態度であり、この批判的態度は検証を求めるものではなく決定的テスト……を求めるものである、という結論に達した。

そして、アインシュタインから学んだこととして、「アインシュタインが示したように、……もつとも確立した科学理論ですら、……覆えされたり、修正されたりする。したがって、もつとも確立した科学理論ですら、つねに仮説であり、推測にとどまる」ということを挙げている。<sup>(12)</sup>

この事実を踏まえ、ポパーは、われわれは真理の所有者ではなく、探究者であるとし、「科学と哲学におけるわれわれの主要関心事は大胆な推測による真理の探究と、われわれの競合的な諸理論の

うちの偽なるものの批判的探究であり、あるべきである」と科学ならびに哲学を規定している。<sup>(13)</sup>

ここでわかることは、ポパーは「批判」というものを、独断論者や懐疑論者とは違って、論敵を攻撃するための手段としてではなく、真理探究の過程の中の重要な要素としてみていることである。それは、真理探究における批判的方法の正しいあり方とはどういふものであろうか。ポパーは次のように述べている。<sup>(14)</sup>

〔批判〕は科学理論の〔真なることの〕証明や正当化をしたりするものに対する攻撃ではなく、理論自体への攻撃である。理論が真であることを示しうるという主張に対する攻撃ではなく、理論自体が語っているもの——その内容あるいはその帰結——に対する攻撃である。

すなわち、理論の帰結を批判的にテストし、誤謬を排除しながら、段階的により誤謬の少ない、したがってより真理に近づく理論を探す試みである。理論はそもそも真ではないのだから、誰にも正当化を要求しない。そしてどんな理論もさらなる改善の余地があることを認めつつ、現時点での批判的検討の結果、批判に耐えているとして暫定的にその理論を受け容れるのである。これがポパー流の「批判的合理主義者」の批判的探究法であり、理論の受容、拒否の仕方である。

では、批判的合理主義者は、独断論者や懐疑論者とどこが違うのであろうか。独断論者は、自分の理論のみに特権的地位を与え、そ

の理論を独断的に受け容れたまま、論敵の理論を攻撃するためにだけ批判的方法を用いるが、批判的合理主義者は、自分が暫定的に受け容れている理論を含め、あらゆる理論を絶えず批判的テストにかたり、異なった理論を受け容れている人々と批判的議論を行うことによつて、より真理に近い理論を求めらるのである。したがつて、自分の理論を批判する者は、論敵というより、真理を探究するうえでの協働者なのである。

懐疑論者は、真理を所有していないと主張する点では正しいが、われわれの理論の真理性を正当化できない限り、それを受け容れてはならないと主張する点で誤っているのである。また懐疑論者は、誤謬を排除し、真理に接近することさえできないのである。というのは、彼らはある理論が偽であると主張するための理由や正当化を要求するからである。その要求は、先程述べたように、人を無限後退に陥らせることになる。

ポパーの批判的方法の卓見は、正当化と批判を切り離したことに存する。バートリーは次のように述べている。<sup>(15)</sup>

ほとんどのすべての伝統的哲学および現代哲学では……批判の観念は正当化の観念と融合していた。……ポパーの立場の主要な独創性は、哲学史上最初の非正当化主義的な批判哲学であるという事実に存する。

ポパーの批判的方法が何らの正当化もしないで済ましようという主張に対して、次のような反論がなされるかもしれない。

批判には無前提の批判というものはありません、あらゆる批判は何らかの前提から出発しなければならぬのであるが、その前提は真でなければならぬのではないか。もしその前提が偽だとしたら、その批判は妥当とはいえないであろうから。したがつて、その批判が妥当であることを示すためには、その批判の出発点である前提が真であることを正当化しなければならぬ。もしポパーのいうように<sup>(16)</sup>、あらゆる正当化が不可能なら、批判も不可能になるであろう。

この批判に対しては、次のような反批判をもつて答えることができる。

非正当化主義的な批判的方法では、ある理論を批判する際、その理論の正当化の試みが成功していないという形の批判は排除される。また、批判する際に用いる理論が妥当であることを正当化できなければ、それは批判の役目を果たさないと批判も、正当化主義的批判だとして、排除されるのである。

ある理論を批判するとき、われわれが行うことは、その理論から導出される帰結が偽であるかどうかをテストすることである。そのテストに用いられるテスト言明を真だと仮定する必要はない。原理的に、批判から免れる究極的な言明は存在しない。したがつて、テスト言明も批判的検討を受けなければならぬ。テスト言明を批判する際も、テスト言明から導出される帰結が偽であるかどうかテストする。テスト言明の場合には、帰結が限られているから、たちまち反証に成功するか、あるいは反証の試みが底をつくであろう。反証に失敗した場合には、現在のところ偽とみなすことはできない。

として、暫定的に受け容れる。そして、テスト言明を受け容れれば、それと衝突している理論は反証されたものとみなすことができ。しかし、テスト言明が偽の可能性はつねに残っている。したがって、もし別の反証の方法が見つかった場合には、それをを用いてテストすればよいのである。すべての批判は反証の試みである。その批判はひょっとしたら間違っているかもしれない。その場合には、その批判を反証しようとするはよい。したがって、批判の過程には、反証の試みの連続のみが存在する。そうした批判の過程では、反証の試みに成功しなかった結果として受け容れられた言明が残るであろう。例えば、「今ここに、一つの机がある」という言明は、真であることを証明することはできないが——証明を要求し、できないとして批判するという方法は誤った批判の方法であり、その方法をとらないわれわれには、証明できないとしても問題は生じない——、反証の試みは失敗するであろう。したがって、もしかしたら真ではないかもしれないが、この言明を受け容れてもかまわないのである。

批判をする際にも、何らかの言明が真でなければならぬと考える人は、すでに正当化主義的な思考様式に汚染されているのである。「今ここに、机がある」という言明は真であることにきまっているのに、その真理性を確定できないポパーの知識論はどこか間違っているにちがいないと主張する哲学者もいるかもしれない。

この批判に対し、ポパーだったら次のように答えるであろう。

われわれは、批判期以前に獲得した知識は、修正の余地のない真

なる知識とみなしがちであるが、日常的な常識的知識といえども権的な地位にはなく、様々な誤謬、批判、修正を通じて獲得したものであって、意識的、無意識的な反証の試みの失敗の結果、偽ではないとして受け容れているにすぎないのである。<sup>(17)</sup>

また別の人——数学者や自然科学者——には、この批判的方法はあたりまえのことのように思われるかもしれない。それは、なぜポパーが正当化と批判を分離するまで、この批判的方法は、少なくとも哲学者の間では、発見されなかったのであろうか。

批判と正当化が分離されなかった理由を、バートリーはさらに掘り下げて分析している。それを考察することは、ポパーの唱える正しい批判的方法を理解するのに役に立つと思われる。

バートリーは、正当化と批判が哲学誕生以来、融合してきた理由を次のように分析している。<sup>(18)</sup>

ほとんどの哲学的見解は、暗黙のうちに次のことを前提としていた。すなわち合理的な性格や合理性の度合は、論理的演繹関係によって真理が前提から結論へと転送されるのと同じ仕方でも転送されると。

数学や論理学が人間知識の中でもっとも確実な知識であり、合理性の模範であるという考えが、ギリシャ哲学以来の哲学的伝統であることは否定できないであろう。したがって、合理性と証明が結びつくことは自然のことだったのである。

ところが、経験科学の分野に限っても、理論が証明できないこと

が気づかれるようになったのである。アインシュタインの挑戦によって、ニュートン物理学でさえ修正の余地のない真なる理論ではないことがわかったからである。

confirmationists

そこで、科学哲学者の一派である確証主義者は、「真理性」を「確からしさ」に取り代えたのである。彼らによれば、理論は真であることは証明できないとしても、確からしいというものは証明できるといふ。しかも、「確からしさ」は、「真理」と同様、論理的導出関係によって、前提から結論へ転送可能なのである。というのは、結論の確からしさは前提の確からしさより増すことはあっても、減ることはないからである。そこで、合理性 $\equiv$ 証明(前提から結論への真理の転送ではなく、確からしさの転送ではあるが)という図式はそのまま保存されてしまったのである。ところが、理論の経験的性格は、前提から結論へ転送されないのである。というのは、あらゆる経験的言明から、トートロジーが導出されるが、トートロジーは経験的言明ではないからである。したがって、理論に確からしさと経験的性格の両方を求める、確証主義は破綻するのである。理論の確からしさが増大すればするほど、トートロジーに近づき、経験的性格が減少するからである。

ポパーは、合理性 $\equiv$ 証明という図式を捨て、合理性 $\equiv$ 反証、批判の図式に取り代える。反証とは、結論から前提への偽の逆転送である。ポパーの批判的方法は、真理所有の正当化の道具ではなく、真理探究の道具であり、偽を発見し、それを排除することによって真理に接近しようとするものである。この観点に立てば、誤りを認め、排除することと、証明できないとしても、偽と判明しないもの

を暫定的に受け容れることとは、むしろ合理的なのである。

註

(一) Karl R. Popper, *The Open Society and Its Enemies*, Routledge & Kegan Paul, London, 1973, vol. II, Chap. 24  
Karl R. Popper, *Conjectures and Refutations: The Growth of Scientific Knowledge*, Routledge & Kegan Paul, London, 1974, Passim.

Karl R. Popper, *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*, Oxford University Press, London, 1974, Chaps. 2, 3, 8.

このことはカントがすでに述べているといわれるかもしれない。例えば、「理性はそのあらゆる企てにおいて批判に従わなければならない」……効用の点でいかに重要なものであっても、またいかに神聖なものであっても「……吟味と検討の探究を免れるものはなにもなし」(I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner, Hamburg, 1956, B. 766. ホーナーが「批判主義」をカントから学んだかどうかはさておき、ヒュームを懐疑論者の典型とみなす点でポパーはカントと一致している。しかし、その懐疑論の批判の仕方において、ポパーはカントと相違しているのである。カントはヒュームの懐疑論を「純粹数学および一般自然科学の實際に適合しなり」(Kant, *op cit.*, B. 128) という理由で批判している。アインシュタインの理論が出現する以前なので、当然といえは当然なのであるが、



当時ニュートン力学は絶対的に真なる理論であると認められていたので、(ニュートン力学を典型とする)科学的知識が妥当であることに基づいて、カントはヒュームの懐疑論を批判しているわけである。カントには酷かもしれないが、われわれの知識のなにかが絶対的に真なる知識であるとみなす立場を独断論だと考えるならば、カントは彼の意に反して、独断論者なのである。他方、ポパーの批判主義では、ヒュームが懐疑論の帰結を導く論証の仕方を批判的に検討したうえで、ヒュームが誤った批判的方法を用いているために、懐疑論に陥ってしまったと分析できるのである。カントがヒュームを「自然科学の助けを借りて、いわば超越的に批判しているのに対し、ポパーにおいてはヒュームを内在的に批判しようわけである。むしろ、ポパーは、後述するように、フインシュタインから自然科学の理論が真ではならぬことと、真理に接近するものであることを学ぶ、そこから、反証主義(falsificationism)と云われる、非正当化主義的批判的方法を見出したのである。

(2) 政治への応用は、Hans Albert, *Traktat über Kritische Vernunft*, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1975, Kap. VII.

教育への応用は、H. J. Perkinson, *Education and Learning from Our Mistakes*, in *In Pursuit of Truth*, ed. by Paul Levinson, Humanities Press, New Jersey, 1982, PP. 126—153.

(3) Karl R. Popper, *Intellectual Autobiography*, in *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by Paul Arthur Schilpp,

Open Court, Illinois, 1974, p. 92.

(4) W. W. Bartley, III, *A Popperian Harvest*, in *In Pursuit of Truth*, P. 250. 傍点筆者。

(5) 注(一)で挙げたポパーの著作の他に、こので用いられた論文は、Karl R. Popper, Einstein: Early Years, in *Physics and Man*, ed. by Robert Karplus, W. A. Benjamin, New York, 1970, PP. 47—52, *The Myth of the Framework*, in *The Abdication of Philosophy*, ed. by E. Freeman, Open Court, Illinois, 1976, PP. 23—48, である。

また、ポパーの著した有名な弟子の一人と目されるブートリーが、ポパーの独創的な「批判的方法」に注目して「合理性の理論の一環としてはあるが、それに言及してゐる。筆者は、ポパーの批判的方法を明らかにするうえで、ブートリーの洞察に恩恵をうけたらう。W. W. Bartley, *The Retreat to Continuity*, Chatto & Windus, London, 1964, 第4章 Rationality versus the Theory of Rationality, in *The Critical Approach to Science and Philosophy*, ed. by Mario Bunge, The Free Press, New York, 1964, PP. 3—31.

(6) Popper, *The Myth of the Framework*, PP. 45—46, Popper, Einstein: Early Years, P. 48.

(7) Popper, *ibid.*, P. 48. 原文では「哲学者に名前がついてゐる Mr. Adam, Mr. Baker など」が「それぞれ A, B, C として記した」。

(8) この(誤)た)批判的方法を用ゐることでどうなる結果が生

ちるかとどう考察は、ホーナーは行っている。

(9) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by D. G. C. Macnab, Fontana Library, William Collins, Glasgow, 1975, PP. 238—244.

(10) バートリーは『*The Retreat to Commitment*』で、アメリカのプロテスタントが、合理主義者による批判から、プロテスタントイズムを擁護するために、この方法を用いていることを示したのである。

(11) Popper, *Intellectual Autobiography*, P. 29.

(12) Popper, Einstein : Early Years, P. 47.

(13) Popper, *Objective Knowledge*, P. 319. ホーナーの哲学(形而上学)に関する考え方は、伝統的な哲学者とは違って、哲学は人間知識の中で至高のものであり、哲学者は特権的地位を享受するものであると、哲学に固有の方法があるとも考えない。科学も形而上学も共に、世界——われわれ自身およびわれわれの知識をその一部として含んでいるところの世界——を理解しようとする果てしなき探究の企てとホーナーはみなしている。そして、科学は経験的にテスト可能であるのに対し、形而上学は可能ではないという点で区別される。しかし、この区別は絶対的なものではない。これまでテスト不可能だったもの(したがって形而上学とみなされてきたもの)が、知識の進歩によって、テスト可能になることがあるからである。科学と形而上学との関係の問題およびテスト不可能な形而上学の批判的議論は如何にして可能かという問題は、本稿では取り上げるこ

とができなかった。別の機会に譲りたいと思う。

\* 『科学的発見の論理』では、ホーナーは『論理実証主義者のための形而上学を無意味とはみならなかったが、科学者の一級低いものとみなしていった。最近出版された『補遺』では、恐らくアガシやフアンチャーレンツの影響を受けているという、評価的区別をしない傾向が現われている。そこで、「区別」という用語を用いたのである。Karl R. Popper, *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson, London, 1975 (First impression 1959), PP. 38—39, PP. 277—278. Karl R. Popper, *Quantum Theory and the Schism in Physics : From the Postscript to The Logic of Scientific Discovery*, ed. by W. W. Bartley, III, Hutchinson, London, 1982, PP. 159—211. J. Agassi, The Nature of Scientific Problems and Their Roots in Metaphysics, 1964, in *Science in Flux*, Reidel, 1975, PP. 208—233.

P. K. Feyerabend, How to be a Good Empiricist—A Plea for Tolerance in Matters Epistemological, in *Philosophy of Science : the Delaware Seminar*, vol. 2, Interscience Publishers, New York, 1963, PP. 3—39.

(14) Popper, Einstein : Early Years, P. 48. 傍点の箇所は原文イタリック。

(15) Bartley, *Rationality versus the Theory of Rationality*, PP. 22—23. 傍点の箇所は原文イタリック。

(16) この種の批判については、Popper, *The Open Society and*

*Its Enemies*, vol. II, Pp. 378—380. でも批判的分析がなされているが、この次に行く反論は、ポパーの批判哲学から当然導かれるであろう帰結を推論した結果によるものであり、ポパー自身が直接述べている反論ではない。

(17) ポパーは、*Intellectual Autobiography*, Pp. 34—41 の、独断的局面が批判的局面に先行することを、例を挙げながら、強調している。

(18) Bartley, *Rationality versus the Theory of Rationality*, P. 24. 原文はイタリックであるが、傍点は省略した。

(19) 前提の方が結論より演繹力が同等かより強く、それだけ偽の可能性が大きいからである。

(たちばな・きいち 筑波大学大学院哲学・思想研究科存学中)